

著者はこの手紙を感得する者たちの活動によっても、ヨハネの共同体踏み止まった人たちに宛てて書いています。この手紙の目的は、読者に現に永遠の命を持っていることをわかってもらうことです。イエスを信じる者は信仰によって神さまから新たに与えられる命、永遠の命が今自分の内にあるという確証を持っており、しかもこの永遠の命はイエスの内にあるというのです。これはヨハネ文書が繰り返して述べる神さまとイエスと教会との一体性です。14~15 節では、神さまから救いを与えられたいという人間にとって、神さまは永遠の命を与えてくださるのだから、私たちの祈りを必ず聞き届けてくださるといのがキリスト者の確信であると述べています。

16~17 節にはよく知られている「死に至る罪」という言葉が出てきます。「死に至る罪」とは、神さまがイエスを人間の根源的な罪の贖うため、十字架上で死に至らしめたのに、その神さまの愛を拒絶すること、つまり、イエスを信じないことであると考えられます。それは神さまがその人たちを残酷に扱われることではなく、神さまの救いを自分から失ってしまうことなのです。また、「死に至らない罪」とは神さまの御心に背いている状況にあることをいい、そのような状況に陥っている兄弟については、執り成しの祈りをもって願えば、神さまは赦して再び命を与えてくださり、神さまとの交わりに復帰させることになる、と励ましているのです。

19 節で、共同体とこの世全体の対立が、「神に属する者」と「悪い者の配下に置かれている者」の対立として述べられています。しかし、神さまは、あらゆる総ての人を排除することなく、総ての人を招いているのではないのでしょうか。ここにはこの手紙がユダヤ教との対立の中で、また共同体の中にも異なる教えを述べる人たちがいるという中で記されたという状況が反映されています。このような状況の中で、「永遠の命」の約束が共同体の人たちを支える力となったことは想像に難くありません。

では、今日の私たちにとって「永遠の命」の約束はどのような意味を持つのでしょうか。私たちの命ははかないもので、一生を通して大した仕事もできません。しかし、そのはかない命に神さまはイエスを宿らせ、また私たちの命をイエスの内に宿らせ、神さまの計画の内に置いてくださっています。私たちの日常の小さな業も、ささやかな出会いと関わりも、イエスにあって豊かに用いられ、時に深い意味を与えられるのではないのでしょうか。そのような気づきと喜び、感謝を通して、私たちは目に見えないところで少しずつ造りかえられ、「永遠の命」へと導かれてゆくのではないのでしょうか。